

九州大学

100周年を迎えて～九州大学農学部附属演習林福岡演習林百周年記念事業

九州大学農学部附属演習林
福岡演習林長 菱 拓雄

九州大学附属演習林福岡演習林は1922年10月に設立され、今年で百周年を迎えた。これに際して、福岡演習林では百周年記念事業として福岡演習林の一般市民への施設開放、篠栗九大の森見学会、福岡演習林を利用した研究成果の発表会を開催するとともに、総長および理事、学部長、所在地域の町長、教育や管理運営に携わる地元協力者を招いての百周年記念式典を執り行った。式典後、記念講演会を開催し、九州大学の長期研究施設を代表する福岡演習林を代表して菱が福岡演習林の百周年のあゆみとこれからについて、また久山町ヘルスC&Cセンター・センター長、清原裕九州大学名誉教授を招いて、久山町研究と久山町の疾病対策事業－60年の軌跡と成果－と題して、久山町で行われた長期に渡る久山町の疫病対策事業とこれに関わる長期研究の歴史と重要性についてご講演いただいた。大学と自治体による長期の研究事業が、強い覚悟と信頼関係によって維持されてきたことを知り、大学における実学研究が一般市民や地元民の応援あってこそ続くのだということが実感できた。私からは、福岡演習林の百年を振り返り、福岡演習林が無軌道に現在の姿になったわけではなく、過去の人為的、自然的災厄や、地元との軋轢や協力、これに対して学生の教育のために先人が行ってきた努力があって現在があること、これを踏まえて進むべき方向はどのようにすべきかについて考える機会となった。

1922年に九州大学の林学科が設立された当初、九州大学は南朝鮮、樺太、北朝鮮、台湾演習林と海外に4万ヘクタールの演習林を財産として有していた。これらは林学の教育施設としてはあまりに遠く、箱崎のキャンパスに近い森林の現場教育施設がもとめられた。そこで九州大学の林学学生が現場で林業の勉強をするために篠栗町、勢門村（現篠栗町）と久原村（現久山町）に設置されたのが福岡演習林である。1923年には初めての実習、森林経理測樹実習がおこなわれ、以来百年間学生の実習を続けてきた。つまり、福岡演習林は設立の当初から森林を学ぶ学生の教育を目的とした施設として設立され、その役割は100年間変わっていない。しかし果たす役割は変わらずとも教育に含まれるコンテンツや思想は100年の間に大きく様変わりしている。また、森林の様子も大きく変貌を遂げてきた。

福岡演習林の設立の当初は、わずかに古い二次林を残すのみのアカマツを主体とする二次林がほとんどで、他にも火災跡の二次林や萱原、利用の激しい二次林、成績不良の造林地などで構成され、状態の良い森林は殆ど見られなかったようである。さらに、第二次世界大戦の末期、終戦後十年ほどの間は木材需要が急増し、計画を遥かに上回る伐採が行われた。戦後10年までで伐採された木材は、福岡演習林が設立から現在まで伐採した木材の積算量の7割にのぼる。また、この頃マツ枯れ被害が拡大したため、マツを中心とした林相を持つ当演習林はひとたまりもなく、被害が大きい年には年間伐採量の3倍ものマツが老齢大径木を中心に枯損した。また1956年の雪害、台風被害は年間伐採量の5年分ほどに当たる4千 m^3 の材積に被害が出たため、当時の経営計画案を破棄し、臨時の経営案を立てる必要に迫られた。このように、戦中、戦後においては経営計画に沿った林地施業は殆どできなかった。こうして荒れ果てた林地の回復をするために、林業の育種試験を核とする総合開発研究や事務所構内の樹木園などを含む総合試験施設地区の造成などに取り組み続けてきた。こうして現在まで、なんとか必死に林地回復に努めているが、当初の乱伐とその回復の施業の位置や記録の情報が混乱したままであり、現在もなお現地調査、空撮、地理情報などを統合して、正確な森林情報の提供ができるように整備を続けている。

1980年代後半になると、九大演習林は、林学のための林業経営の場から、より多様な学術研究

や科学的要請に応えるための大型野外実験施設として再定義された。さらに 1990 年代には福岡演習林は都市近郊林として位置づけられ、地域社会との連携や市民教育の強化なども進められた。特に 1990 年代に入ると、国際的にも、また国内の大学生、一般市民の間でも環境問題や気候変動の進行や、これを緩和しうる森林生態系の役割が注目されるようになった。国際的には生物多様性条約や、気候変動枠組条約が採択され、日本でも種の保存法や環境基本法が公布された時期である。現実に国際的な環境対策への取り組みや研究が求められるなか、福岡演習林は 2003 年に重要生態系監視地域モニタリング推進事業モニタリングサイト 1000 へ加入し、また、長期の国内外とのネットワーク研究を推進する日本長期生態学研究ネットワーク (JaLTER) に 2006 年から加入している。また、国際的なネットワーク研究だけでなく、地域固有の文化的な森林利用への貢献として、檜皮生産を行う 100 年生ヒノキ林、木材生産を行うクスノキ林が文化庁ふるさと文化財の森として登録されている。

福岡演習林では、2005 年から毎年、地元との協議会を開催している。九州大学演習林は独自の取り組みとして地元との協議会を通じた良好な地域連携を実現している。協議会は九大と地元自治体、教育関係者、消防・警察等の公的機関や地元住民で構成され、演習林を活用した地元連携や社会連携について協議する場である。社会教育では、周辺地域の初等、中等教育施設を対象とした森林・環境教育に取り組んでいる。また、福岡県教育センターと共催で公開講座を開催し、初等・中等教育を担う教職員を対象とした環境教育の実践を通して、児童生徒に還元できる研修を提供している。これらの社会教育における取り組みについても、福岡演習林協議会で常に地元住民と共有し、よりよい方法を模索している。また、地域連携の目玉として、2010 年に福岡演習林の林地を篠栗町と共同管理し、一般市民に開放する初の試みである篠栗九大の森のオープンが挙げられる。市民の憩いの場、散策路として開放し、オープン当初は年間 2 万人強だったが、ラクウショウが水面から生える姿が SNS で人気を呼び、一時期は 13 万人を超えた。コロナ禍もあり、現在は 6 万人ほどに落ち着いている。多くの人に愛されている一方で、過剰な人気による地元住民の困惑もあるため、地元自治体、住民、公的機関関係者と篠栗九大の森で生じる問題について話し合う篠栗九大の森協議会を開催している。

九州大学の学生の教材とするための林地づくりの努力も続けられている。例えば、分子生物学的手法に基づいた新しい植物の分類体系に沿って、植物進化を学習するための進化果木区や、亜熱帯、宮崎演習林がある九州山岳の中間温帯、北海道演習林の冷温帯林など様々な気候帯の樹木の展示や、さまざまな森林に関わる資料を集めた「かすや資料館」の整備などである。一方で、自分を含めて九州大学や我々演習林スタッフが、森林や環境の現在の課題として取り組んでいる研究の現場で何がおこっているのか、という進行する研究への展示に関して不足していることが課題であると感じた。現場の科学を実践する場としての演習林は、地元の抱えている課題の解決を示すことでそうした展示に繋がるのではないかと感じられる。百年前と今では、置かれている状況は大きく異なっているが、現場で生じた問題に取り組み、答えを見つけ、これを教育の材料とする取り組みは、昔も今も同じかもしれない。



1926年(大正15年)9月実習学生